第23回アジアジュニア自転車競技選手権大会 団体追抜競走4キロ

銀メダル 田川翔琉（たがわかける）

「次は個人種目での世界選手権金メダル」

1月26日・27日に、静岡県伊豆市伊豆ベロドロームで開催された、第23回アジア・ジュニア自転車競技選手権大会。団体追抜競走4キロに出場した、田川翔琉（かける）君（高木・ルーテル高校3年）が銀メダルに輝いた。

出場した種目は、1チーム4人が1周250メートルのバンク（コース）を縦列に並んで16周し、3人目のゴールタイムを競う。

順当に勝ち上がった1位―2位決定戦。作戦では、チームの設定タイムが遅れた時にタイムを上げ、途中で離脱する予定だったが、レース途中、日本チームのひとりが脱落するアクシデントが発生。離脱できない状況になり、最後は気力でゴールした。日本チームは4分17秒323。韓国チームの4分15秒164に、約2秒届かなかった。

「大会前に、優勝できるタイムが出ていた。金メダルというプレッシャーがあったが、高校生最後の大会、そして、初めての日本代表で銀メダルが獲得できて本当にうれしかった」と、うれしそうに話す田川君。高校卒業後は、明治大学に進学し、自転車競技を続ける。

次は、夏にスイスで開催される世界ジュニア選手権へ出場予定だ。

◉団体追抜競走（チームパーシュート）

4キロを1チーム4人でタイムを計測して優劣を競うレース。ホーム・ストレッチとバック・ストレッチから両チームがスタート。3番目の選手の前輪前端がゴールしたタイムがチームのタイムとなる。4人が空気抵抗による減速と疲労を避けるため、順番に先頭を交代しながらレースを進めていく競技。

アジア大会でのレース風景
右から2番目が田川君

田川君の活躍は、熊本の自転車情報を発信する「シクロくまもと」で見ることができます。 → シクロくまもと 検索

自転車を始めて4年でアジア銀メダリストとなった田川君。アジアの次は世界の舞台を目指す。

やるからには日本一―

「自転車をやりたい」と父に相談したのは中学3年生の時。1学年上の先輩から「一緒に自転車をやらないか」と誘われたことがきっかけだった。父・辰二さんは競輪選手。相談を受けるまでは一度も自転車競技を勧めなかったという。自転車の厳しさを知る父からは「本当にやる気があるのか？中途半端な気持ちじゃないのか。やるからには、日本一になるんだという覚悟がないとさせない」と言われた。それでも自転車をしたいという気持ちは変わらなかった。

悔しさをバネに

高校には自転車部がなく、先輩や父と一緒に練習をした。タイムが伸びだしたのは、2年生時の九州大会での敗戦後。「敗戦が悔しかったようで、自分で練習方法などを考えるようになってかタイムが伸びてきた」と父は振り返る。田川君が得意とする中・長距離は持久力勝負。1日休むと取り戻すのに3日かかるといわれ、「練習は楽しいというより、きつかったという思いしかない」というほど、ほぼ毎日練習した。

家族との練習

先輩の卒業後は、ひとりで練習した。家に帰ってからは、100キロから150キロを走る。夜間は父母が後ろから車のライトで照らした。練習に付き添った車の走行距離は地球3周分（12万225キロ）を超えた。「両親には感謝しています。練習に付き合ってくれた両親がいたから、銀メダルも取れたと思う」

世界の舞台で―

「自転車競技がメジャーなヨーロッパに比べれば、日本は競技人口も少なく、世界の舞台で勝負するにはまだまだレベルアップが必要。でも、がんばればオリンピック出場も夢ではない」と辰二さんは話す。

そして、田川君の目標も世界大会でのメダル。「次はジュニア世界選手権。年齢制限で最後のチャンスなので、個人優勝を目指したい。そして、将来はプロなどが出場するエリートでの優勝を目指して頑張りたい」と力強く目標を語った。

◀同じ競技者として、父として近くでサポートした辰二さん（左）

時間があれば▶
二人で練習

◉プロフィール・たがわ かける

平成10年生まれ。高木在住。高木小学校、ルーテル中・高。中学3年生から自転車競技を始める。中距離から長距離を得意とし、持ち味はダッシュ力と持久力。日本自転車競技連盟ジュニア強化指定選手。身長165センチ。体重68キロ。太股62センチ。